

富山市飯野新屋遺跡

主要地方道富山環状線工事に伴う
古墳時代前期集落跡の調査概要

1987年3月

富山市教育委員会

例　　言

- 本書は、富山市教育委員会が実施した主要地方道富山環状線（新屋地内）建設工事に係る富山市
飯野新屋遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 調査は、富山県土木部道路課の委託を受けて、富山市教育委員会が実施した。
調査及び報告書作成は、昭和61年8月1日～昭和62年3月20日に行った。
- 調査は、富山女子高校教諭 舟崎久雄、富山市教育委員会学芸員 古川知明が担当した。
- 調査にあたり、次の諸氏及び諸機関の指導と援助を受けた。記して謝意を表したい。
富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、富山土木事務所、富山市新屋地区、富
山市宮町地区、久々忠義・岡本淳一郎・酒井重洋（以上富山県埋蔵文化財センター）、大野 宪・
大竹 豊（以上富山大学学生）、駒見佳容子（富山市考古資料館）、山内賢一（富山考古学会）
(敬称略・順不同)
- 遺物の実測は、久々忠義・岡本淳一郎・大竹豊・大野宪の各氏の協力を得た。また遺物の写真撮
影は、埋蔵文化財センター狩野睦氏の指導のもと、久々・岡本・大竹・大野各氏の協力を得て行つ
た。
- 遺物の注記は、昭和58年度調査を継承して「IA」とし、次にグリッド名、遺構名、遺物番号、
日付の順で付した。
- 出土品及び原図・写真類は、富山市考古資料館において富山市教育委員会が保管している。
- 本書の執筆は、舟崎氏の協力を得て古川が行った。

目　　次

I 調査の経緯	1
II 遺構	2
III 遺物	8
IV 小結	12

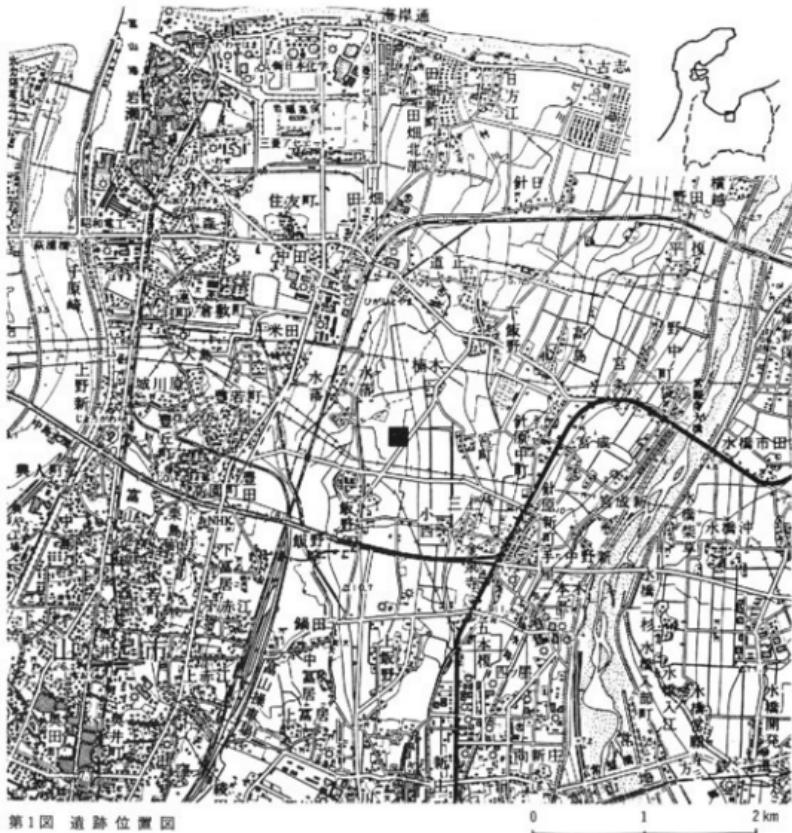
I 調査の経緯

飯野新屋遺跡は、富山市街地の北東約4kmの常願寺川左岸扇状地に位置する古墳時代前期の集落遺跡である。調査地は、富山市新屋28番地を中心とする部分である。

本遺跡発見の契機は、昭和49・50年度に富山市教育委員会が実施した分布調査であり、富山市遺跡地図に(1)No.114「新屋遺跡」として登載された。

その後、昭和58年に至り、富山県土木部による主要地方道富山環状線建設工事に伴う発掘調査が行われ、古墳時代前期に属する井戸・穴・溝跡および平安時代の井戸跡等が検出された。古墳時代前期の井戸跡2基には井戸の使用や廃絶に関わる祭祀が行われておらず、注目された。(2)

今回の調査は、同じく富山環状線建設工事に伴うもので、昭和58年度調査区の北側延長部分に



第1図 遺跡位置図

(3) あたる。工事区域内における遺跡の範囲確認調査は、昭和60年12月および昭和61年3月に行い、溝状遺構や隅丸方形状遺構等の遺構と、高杯・甕・小形壺等の古墳時代前期の土器を検出した。

このため、県土木部と協議を行い、工事にかかる遺跡部分480m²について、発掘調査を実施することになった。

調査は、昭和61年8月1日から9月22日まで行った。

注

- (1) 富山市教育委員会(1976)『富山市遺跡地図』
- (2) 藤田富士夫・古川知明(1984)『飯野新屋遺跡発掘調査概報』富山市教育委員会
- (3) 藤田富士夫(1986)『富山市飯野新屋遺跡試掘調査報告書』富山市教育委員会

II 遺 構

調査区全域にわたり遺構を確認した。検出された遺構には、掘立柱建物跡2棟、土壙3基、堅穴状遺構1、溝2条、穴8基、小穴を有する溝、畝状遺構、川跡、風倒木痕などがある(第3図)。

1 掘立柱建物跡



(1) SB12 (図版3-上)

カ～ケー13～16区において検出した。規模は2間×2間(4.02×3.8m)で、面積は136m²である。棟方向は北西～南東である。柱間距離は、桁行1.97m(p1～2)、2.05m(p2～3)、梁行1.79m(p1～8)、1.98m(p8～7)を測る。

掘り方のプランは円形または椭円形で、径は約40cm、深さ36～55cmを測る。桁行列の柱は二段掘りを行っており、梁行妻柱はこれらよりやや浅く掘られている。

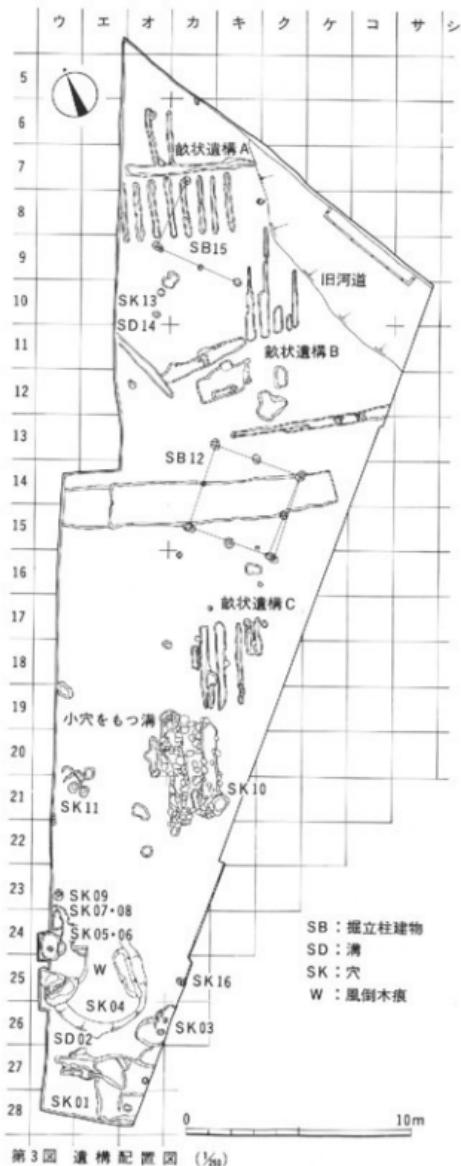
柱痕は、覆土中に黒色土として残存しており、その径は20～25cmを測る。

P5では建て替えと思われる掘り方の重複がある。当初P3とP4を結ぶ直線上に掘ったものを、南側へずらしている。建て替えと思われるが、当初の掘り方は建物本来の柱底レベルよりも浅いので、掘り方の位置修正かもしれない。

各柱穴からは、甕、高杯、装飾器台等の土器片が出土している。特にP1からは、柱痕部直上に土器の一括廃棄がみられるため、掘立柱建物は廃絶時に柱を抜き取っている可能性がある。これは、P5、P7などで柱痕上部の埋土が崩落したり削られていたりすることからも認められる。

(2) SB15 (図版3-下)

オ～キー7～10区において検出した。桁行2間梁行1間分(3.94×3.26m)の柱穴4基を確認した。主軸は北西～

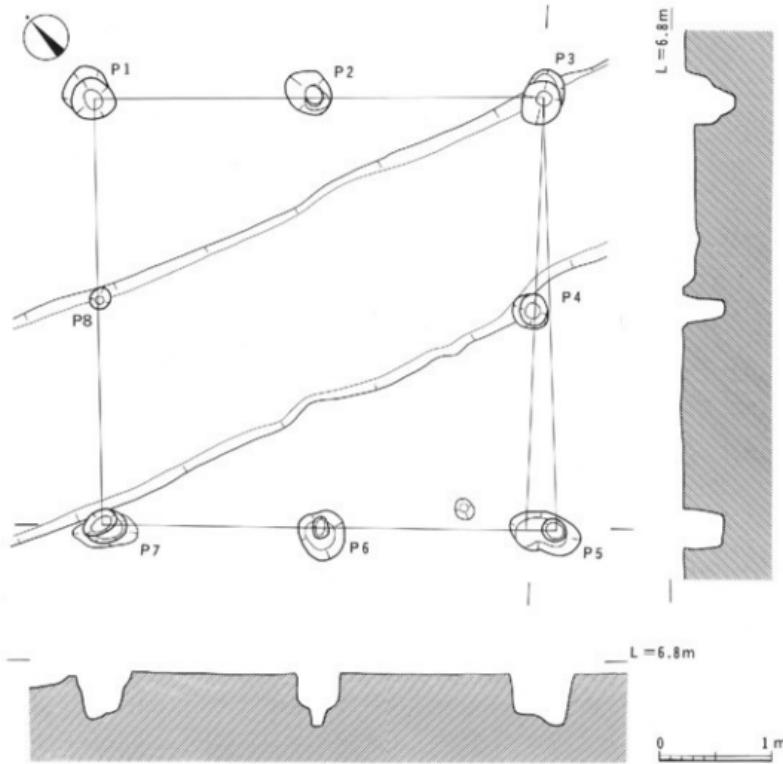


南東方向で、SB12よりもわずかに北にふれている。桁行柱間距離は、北東側から2.2m、1.74mを測る。掘り方プランは円形・梢円形で、深さ14~34cmを測る。河道に近い斜面に位置するため、桁北東隅の柱のみが旧状である。桁行中央柱のみが柱底が浅く、SB12の所見からすれば、桁・梁が逆転するかもしれない。柱穴に伴う出土遺物は、土器小片がある。

2 土 壤

(1) SK05 (第5図・図版4)

ウ-23~24区において検出した。平面プランは溝丸長方形で、規模は長径110cm、短径85cm、深さ30~35cmを測る。底面は同プランで長径100cm、短径70cm、中央やや南寄りに径20cm、深さ12cmの小ビットがある。主軸は北東~南西方向である。本遺構はII層上面から掘り込んで構築されており、その時点での大きさは、推定長径115cm、短径90cm、深さ50cmと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第4図 据立柱建物 (SB12) 実測図 (3%)

覆土は9層に分層され、中～下層の黒色土中から壺・高杯・台付装飾壺・把手付小形壺等が出土している。

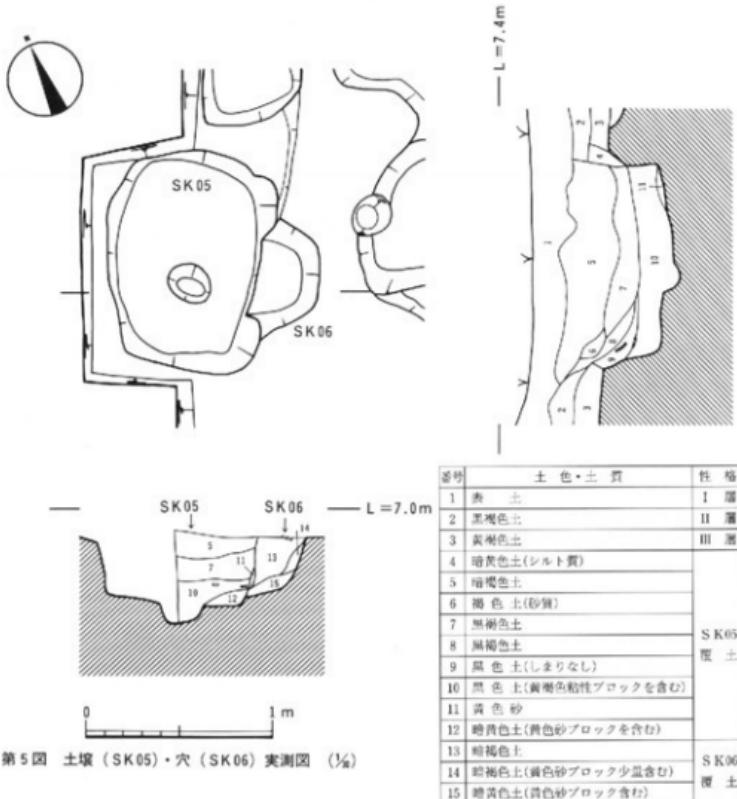
本遺構はSK06を切っており、SK06より後出するものである。

(2) SK10 (図版5—上)

キー21区において検出。北～西壁は溝によって切断されている。平面プランは長方形と推定され、長径80cm以上、短径70cmを測る。深さは36cm。覆土は泥質化した黒色土で若干の土器を出土した。

(3) SK4 (図版4—上)

SK05の南側キー25区において検出した。東半は風倒木により攪乱を受けているが、底面の凹凸やセクション断面から数基の土壙が重複しているものと考えられた。覆土中からの出土遺物は土器片が少量出土している。



第5図 土壙(SK05)・穴(SK06)実測図 (3)

3 堪穴状遺構 (第6図、図版5一下)

S K01 エ～オー27～28区において検出した。北壁は溝 S D02と重複しているので明瞭ではないが、方形状のプランで、東西2.5m、南北3mを検出した。西壁部分での深さは4～8cmである。内部は高さ4～10cmの段や深さ10cm程度のピットがある。南側では炭化木片や壺・甌などの土器や叩き石がまとまって出土している。

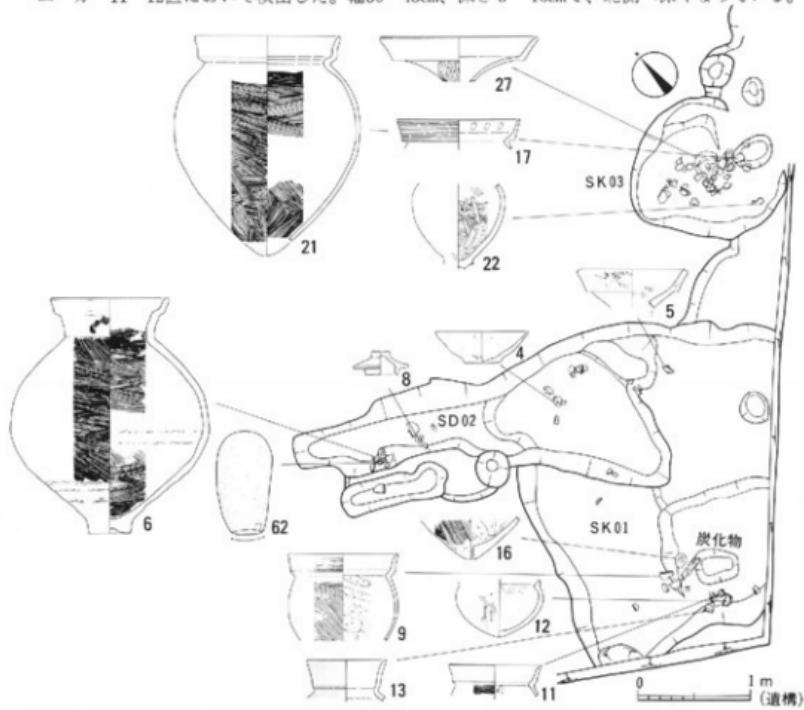
4 溝

(1) S D02 (第6図、図版5一下)

ウ～オー27区において、S K01と重複して検出した。セクションや平面でS K01との切り合い関係は明らかにできなかった。溝として単独の部分では、西側端部で幅30cm、深さ8cm、最も広い部分で幅約60cm、深さ13cmを測る。長さは約190cmである。底面は擾乱を受けているが、ほぼ水平である。出土遺物は、壺・甌・蓋などの土器と石器がある。

(2) S D14

エ～カー11～12区において検出した。幅30～45cm、深さ5～16cmで、北側へ深くなっている。



第6図 穴 (SK01-03)、溝 (SD02) 実測図及び出土遺物

数字は実測図番号

覆土は暗褐色の単純層で、壺や高杯を出土した。

5 穴

(1) SK03 (第6図、図版6-4)

オ～カー26区において検出した。平面プランは楕円形で長径145cm、短径125cmを測る。東壁は別の落ち込みと重複しており残存しない。深さ約15cmで、皿状の横断面形である。覆土は黒色上で、底面から数cm浮いた状態で、壺・台付壺・器台等がまとまって出土した。

(2) SK06 (第5図、図版4-1下)

ウ～24区において、SK05と重複して検出した。切り合ひ関係から、SK05に先行する。平面プランはほぼ円形と思われ、東西35cm、南北65cmの東壁周辺が残る。深さは最深部で35cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。

(3) その他の穴

SK09、11、13、16はいずれも掘立柱建物の柱穴と思われる。SK09は、径20×24cmの楕円形で2段掘りを行う。深さ31cm。SK11は、径35×45cmの楕円形で、深さ46cm。SK13は、径26×35cmの楕円形で、深さ26cm。SK16は、径30cm×40cm以上の楕円形で、深さ32cm。覆土中から赤彩を施した器台が出土した(図版6-3)。これはそれぞれ関連性をもたないので、少くとも検出した建物跡2棟のほかに4棟の掘立柱建物が存在すると思われる。

6 畝状遺構

調査区北端部及び中央部において、畝跡とみられる畝状遺構を検出した。北側の畝状遺構Aは、長さ2.6m、幅30cmの溝8本が並列し、この北側に溝を画して同様の溝2本を配する(図版1-1下)。畝状遺構Bは、長さ幅とも不統一な溝5本が並列する。

調査区中央の畝状遺構Cは、長さ3.6m、幅25～45cmの溝3本及び長さ1～1.5mの溝4本が混って並列する。

7 川跡

キ～7区からサ～11区にかけて東側への落ち込みを認めた。これは大坪川の旧河道路跡で、現在の川にそのままつながるものである。30～40年前は泳ぎのできるような幅広い川であったという。

8 小穴を有する溝跡

カ～キ～19～22区において検出した。幅約70cm、長さ4.5mと5.6mの溝2本の壁面や底部に径10～40cmの円形の小穴が多数認められるものである。この小穴のため、西側の溝はほとんど原形がわからぬ。小穴の成因は不明である。

III 遺 物

出土遺物のほとんどは古墳時代前期の土器で、若干の石器を伴う。

1 古墳時代前期の土器（第7～9図、図版7～9-1-1）

壺・壺・高杯・器台・甑・蓋・鉢・台付装飾壺・手捏土器などの器種がある。

壺 複合口縁の壺が主体を占める。多くの字状口縁の壺はわずかである。前者には口縁部に擬凹線文を施すものと無文のものがあり、端部が外反するものが多い。体部の最大径は胴部や上半にあり、底部は尖底かもしくは径2cm程度の平底を有する。体部外面はハケ目、内面はハケ目またはハラケズリ調整を行う。

壺 幅広の複合口縁をもち、外反するタイプと厚手で直立するタイプがある。第7図6は口縁の幅が狭く、若干の頸部を有するもので、古い様相を示す。

高杯 梗状の杯部に長く外反する口縁を有段化して付すもの（7、26、29）、やや内傾する梗状の杯部とするもの（3）がある。前者の個体が多い。脚部はラッパ状に開くものが多いが、概して小形・扁平である。

器台 細い筒状の脚柱から大きく外反する器受部をもつもの（27）と、小皿状の器受部がつくものの2種がある。前者の口縁は短く有段化する。後者については、ラッパ状に広く脚部（41）と、直線状に開くもの（27）がある。

甑 1点出土した。尖底状の底部に孔をあけるもの（16）である。

蓋 下端部にかえりをもつ壺蓋タイプと、笠形タイプがある。前者のつまみにはボタン状になるもの（25）と、偏平なもの（8）がある。笠形タイプのつまみは、上面を凹ませている。

鉢 複合口縁となる小型鉢（12）と梗状のものがある。4は底部をもつ梗状タイプで丁寧なへラ磨きを行う。49は底部がない浅鉢的なもので、外面にハケ目をもつ。

台付装飾壺 口縁、脚部片が出土している。胴部凸帯には2～4条の沈線をめぐらし、凸部を刻むものがある。図示しなかったが、凸帯に沈線をめぐらさないものもある。

手捏土器 コップ状に整形したものが1点出土している。

把手付きの無頸壺 30はSK05から出土。小形品である。

2 石器

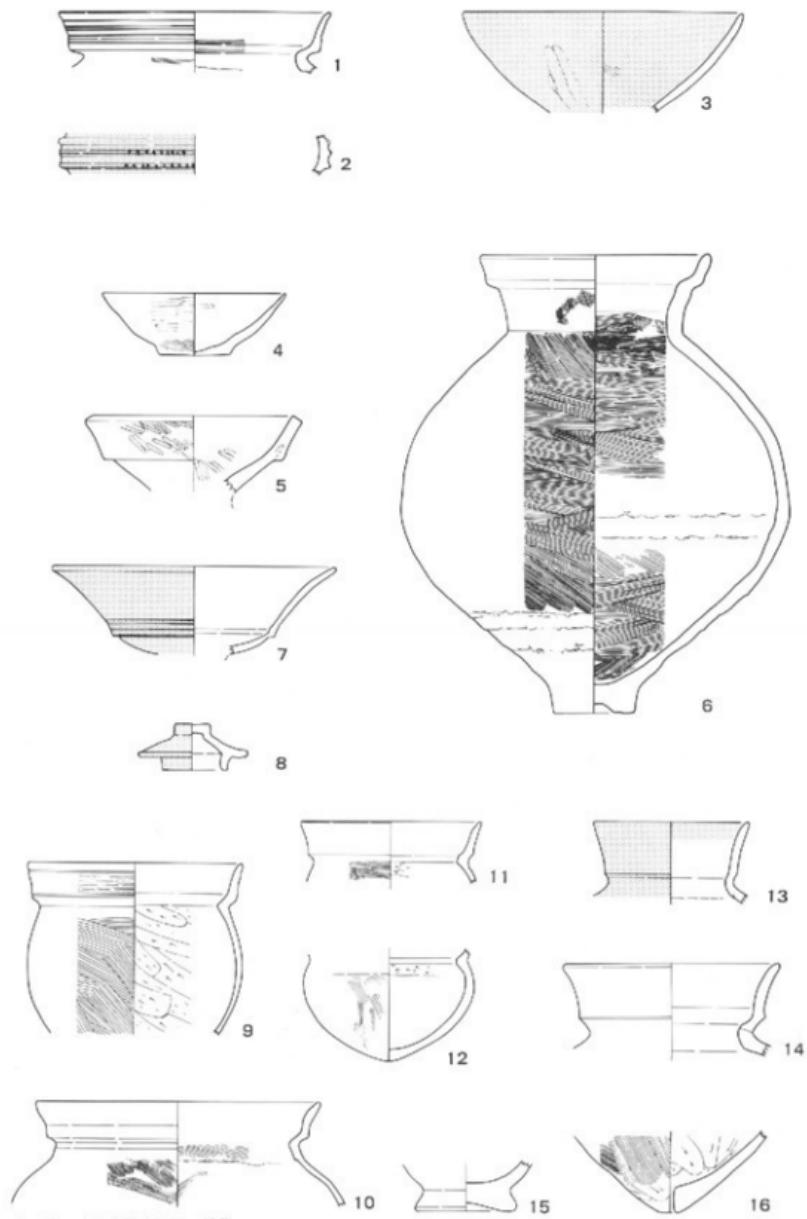
砲弾形石器 (58) 全面を敲打し、両端を尖らせたもの。SK01上層出土。

敲石 断面円形・楕円形の河原石の長軸一端に敲打線を残すもの。59は26区、60はSK03出土。

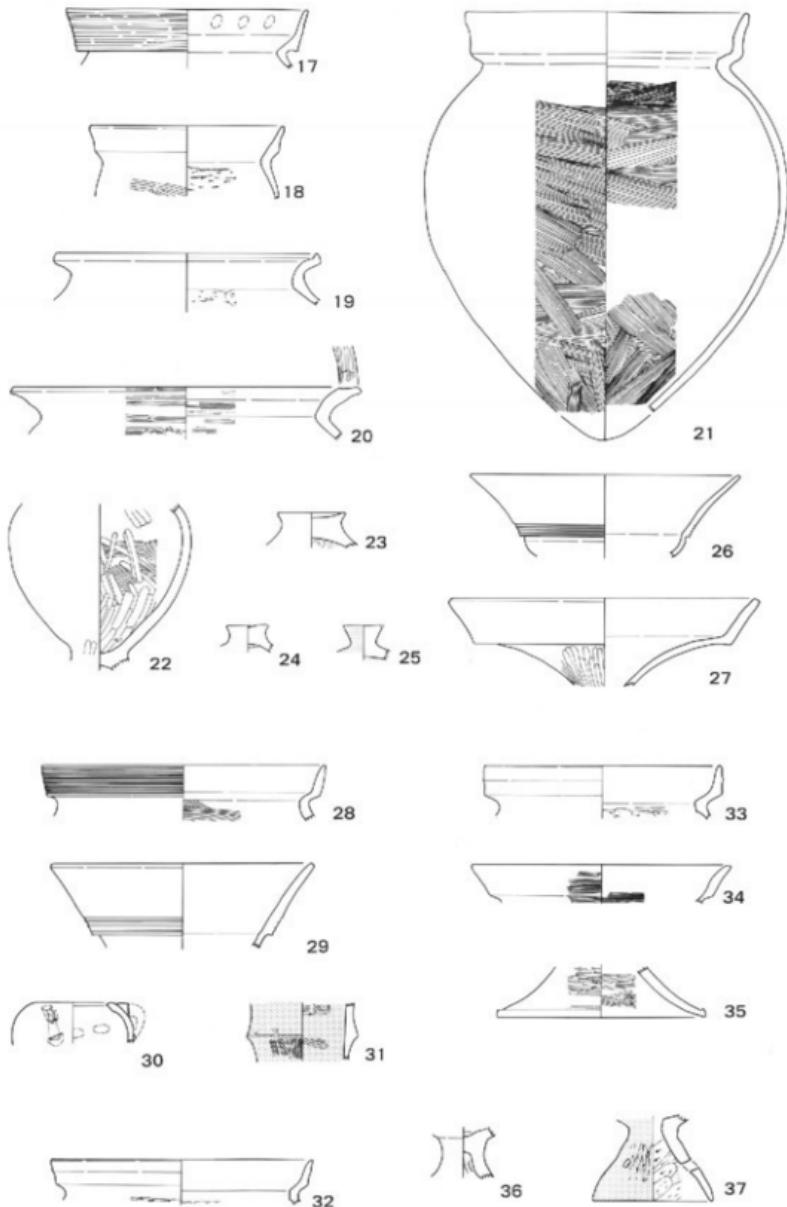
すり石 敲石と同様の河原石の長軸の一端に磨り面を残すもの。この面の周囲の礫表皮は細かく剥れており、敲打を行ったのち磨っているものと考えられる。61はSK03、62はSD02出土。

3 その他（図版9中）

包含層から、製鉄炉壁、平安時代（9世紀前半）の須恵器、珠洲焼片が出土している。

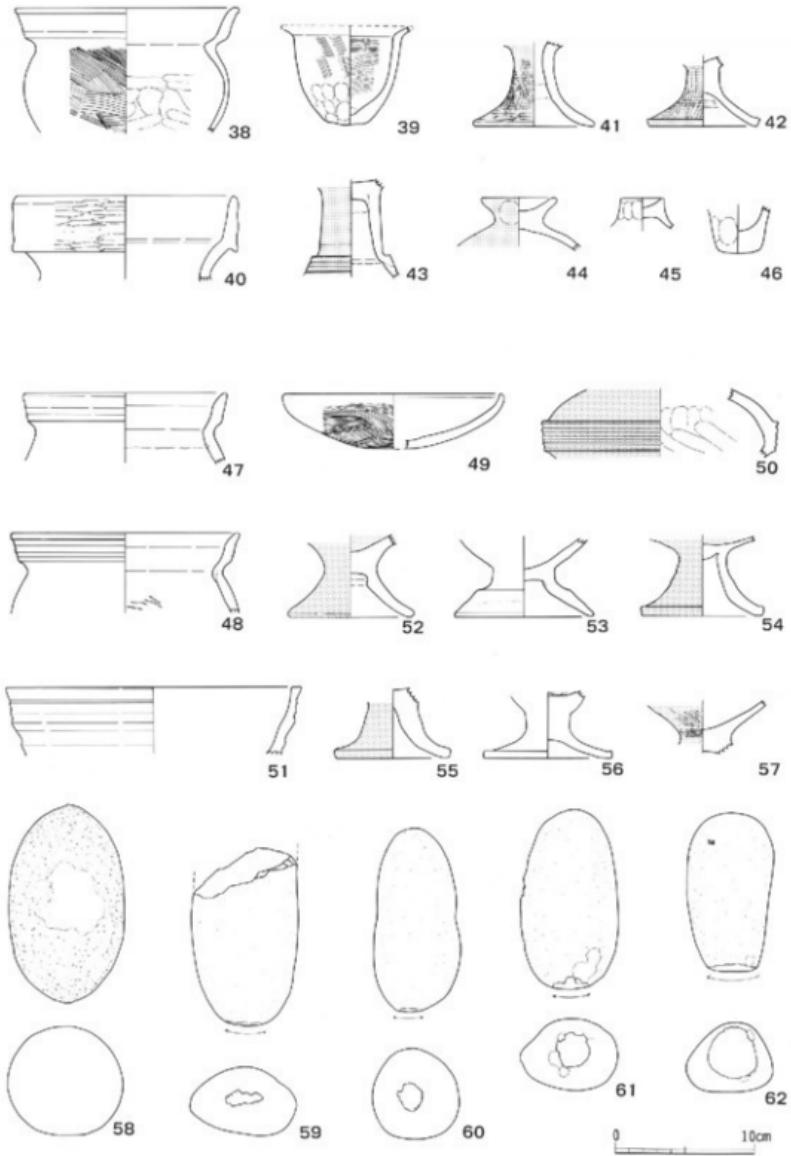


第7図 出土土器実測図 (1/4)
SB12 (1~3) SD02 (4~8) SK01 (9~16)



第8図 出土土器実測図 (1/4)

SK03 (17~27) SK05 (28~31) SK07 (32) SD14 (33~35) SK10 (36) SK16 (37)



第9図 出土土器・石器実測図 (1/4)

6区～24区包含層 (38～46) 26区～27区包含層 (47～57) 緩弾形石器 (58) 敲石 (59～60) すり石 (61～62)

IV 小 結

今回の調査では、飯野新屋遺跡の集落跡としての性格を示す建物跡の検出があった。掘立柱建物は明確な2棟と柱穴のみによる推定4棟と計6棟にのぼる。これに対し、竪穴住居跡は、SK01で甑や炭化木片等住居跡をうかがわせる遺構があるのみである。今回検出した建物は、山下遺物から、古墳時代前期の月影期の所産である。この時期の掘立柱建物については、石川県小松市漆町遺跡で竪穴住居跡を凌駕する数の掘立柱建物跡が検出されており、本遺跡の状況はこれと類似する。3間以上の建物跡は確認していないが、の中には住居として使われたものもあると考えられる。同時期の上市町江上B遺跡では、高床倉庫跡が1棟検出されている。

出土遺物については、遺構・包含層出土のものほとんどが、昭和58年度検出の井戸跡（P6）出土土器の様相と共通し、月影式（月影II式）に位置づけることができる。県内においては小杉町中山南遺跡2号住居跡一括資料にきわめて類似している。近年久々忠義氏は、県内の月影式～高島式期の上器を細分し、飯野新屋遺跡P6資料を第4段階（月影II式期の中段階）に位置づけている。久々編年に従えば、今回出土資料も第4段階として位置づけられよう。

その中にあって、溝SD02出土の壺（6）の口縁部形態は月影以前の弥生後期的な様相を示すように思われる。溝SD02はSK01よりも古いのかどうかについては調査では確認できなかった。

また一方、SK16出土の器台（37）は、脚が直線的に開くもので、古府クルビ期に継承する後出的な様相と考えることができる。

このようにみると、本遺跡では月影II期を中心として、前後に若干の幅をもつことが考えられる。これは前回調査でも井戸の切り合いなどで時間幅が認められたことと矛盾しない。

長方形土壙SK05の性格については、積極的に推定する根拠をもたないが、貯蔵穴もしくは墓地と考えておきたい。

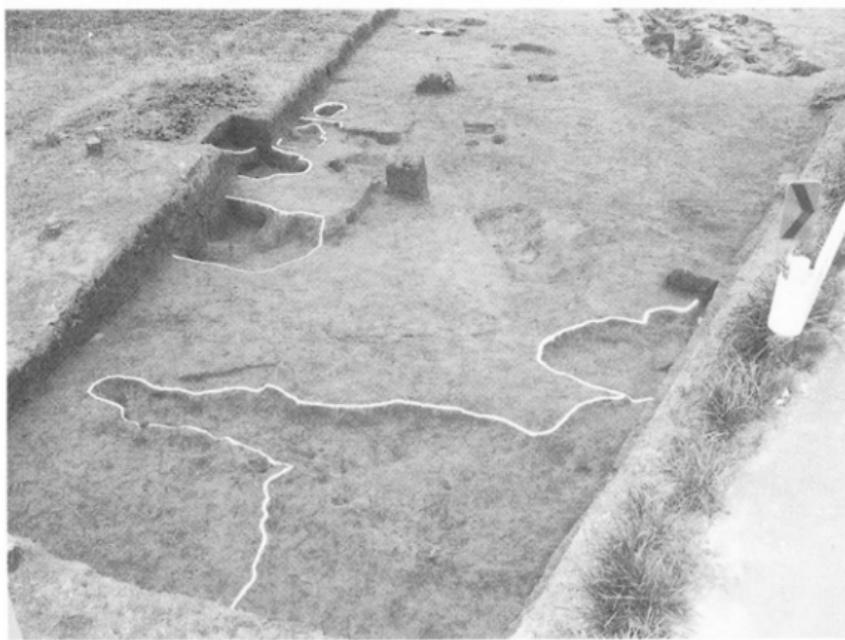
参考文献

- 石川考古学研究会（1986）「シンポジウム「月影式」土器について」発表要旨 石川考古研究会
久々忠義（1986）「富山県における「月影式」土器について」シンポジウム「月影式」土器について発表要旨
- 田島明人（1982）『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
上肥富士夫・橋本澄夫ほか（1984）「国分高井山遺跡」七尾市教育委員会ほか
藤田富士夫・古川知明（1984）『飯野新屋遺跡発掘調査概報』宮市教育委員会
藤田富士夫（1986）『富山市飯野新屋遺跡試掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫ほか（1987）『富山市史 上巻』富山市史編さん室編
宮田進一ほか（1981）『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編—』上市町教育委員会
久々忠義ほか（1984）『向土—上市町木製品・総括編—』上市町教育委員会
谷内尾賀司（1983）『北加賀における古墳出現期の土器について』『北陸の考古学』



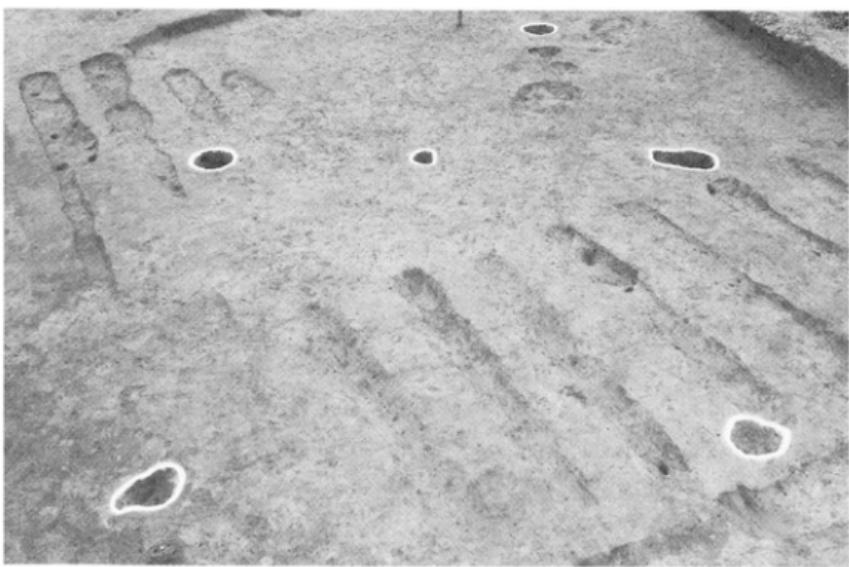
上 遺跡遠景（西から）
下 調査区全景（北から）

図 版2



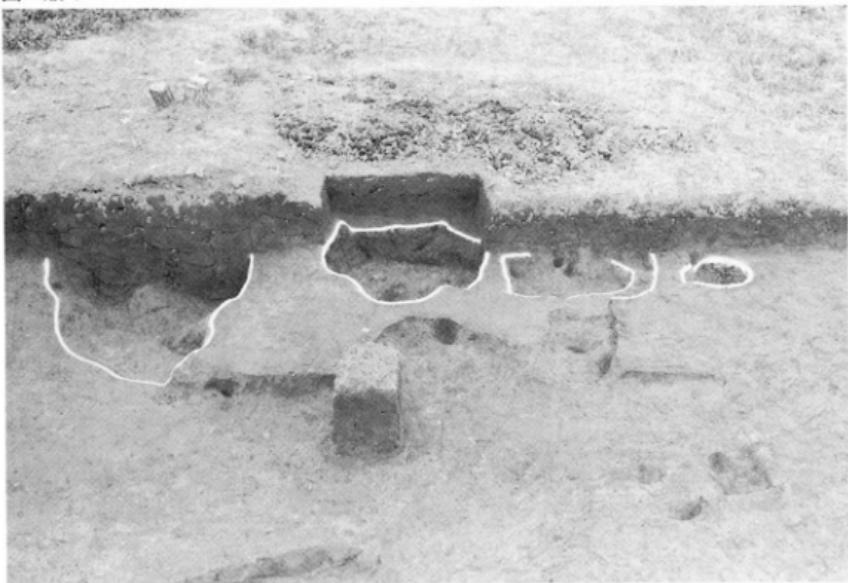
上 調査区北半部（南から）

下 調査区南半部（南から）



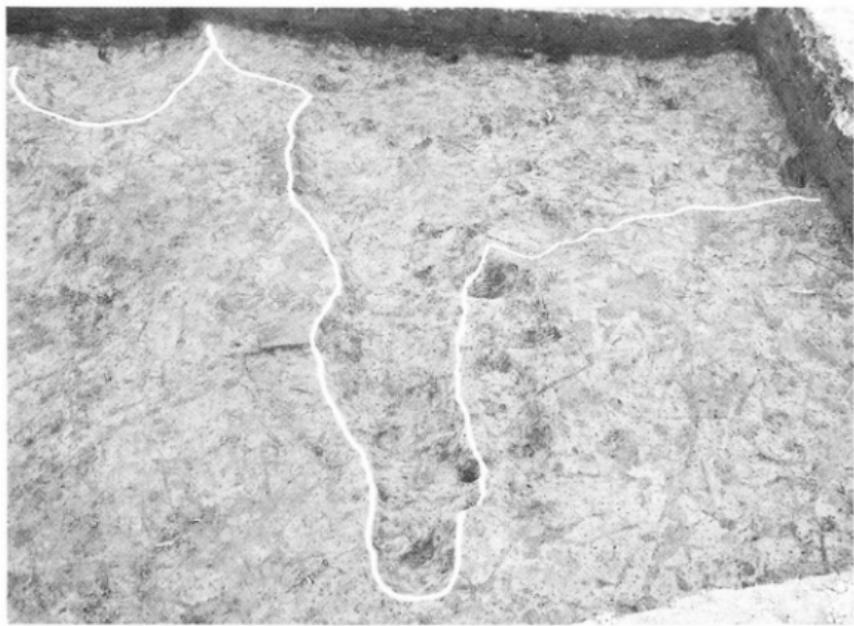
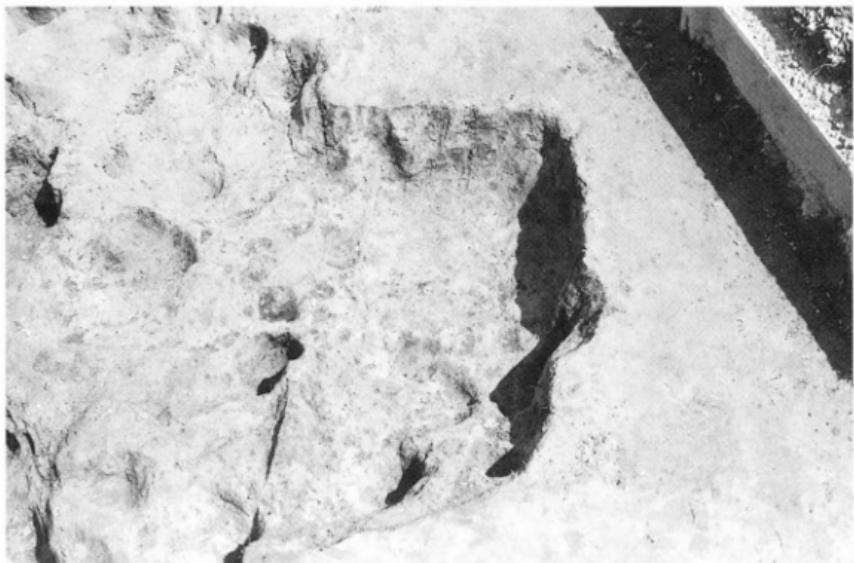
上 挖立柱建物跡 S B 12 (東から)
下 挖立柱建物跡 S B 15 (北東から)

図 版4



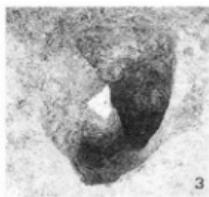
上 穴 SK04~09 (東から)

下 穴 SK05・06 (東から)



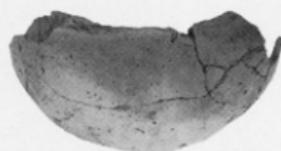
上 穴 SK10 (南から)
下 穴 SK01・溝 SD02 (西から)

図 版6



上 小穴をもつ溝・鉢状遺構C

下 遺物出土状況(1.S D02 2.S B12 P1 3.S K16 4.S K03)



12



21



39



29

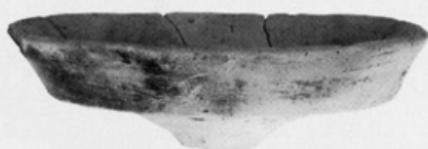


22

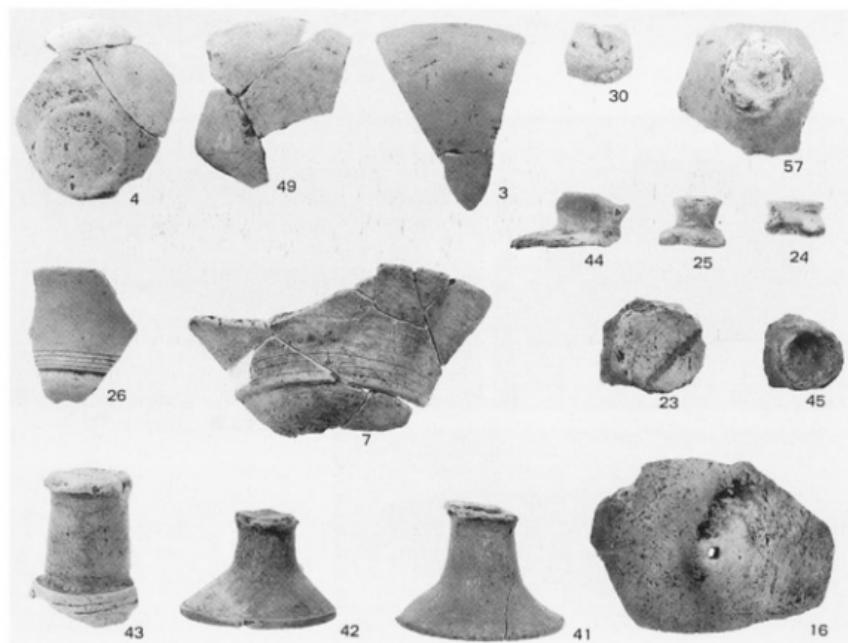
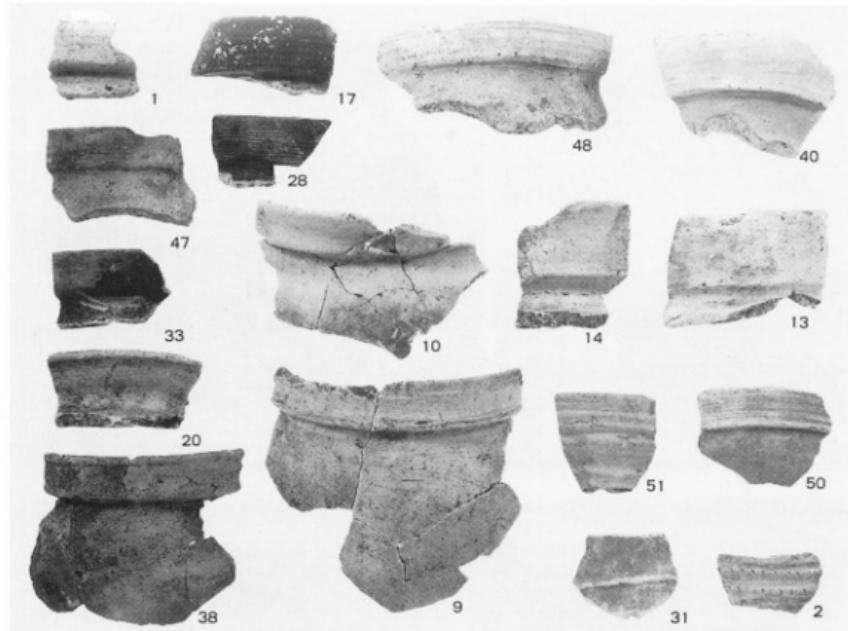


6

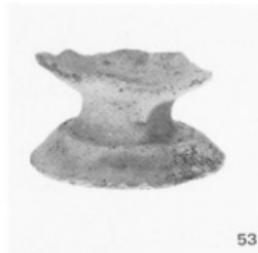
出土土器



27



出土土器



53



54



56



55



37



8



46



炉 壁



須 恵 器

珠洲焼



石 器

59

61

62

60

58

富山市飯野新屋遺跡

主要地方道富山環状線工事に伴う
古墳時代前期集落跡の調査概要

編集・発行者 富山市教育委員会
富山市新桜町7番38号
発 行 昭和62年3月
印 刷 所 ブリヂストン

